上条当麻はなにを見る

灯油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
上条当麻はなにを見る

【Ｎコード】
Ｎ２０３０Ｒ

【作者名】
灯油

【あらすじ】
度重なる不幸で上条当麻の心が折れてしまっていたら。みたいな話。（駄文、オリ展開、原作破壊などがあります。それでもいい方はどうぞ。

プロローグ（前書き）

上条さんの幼少時代の話を見て、思いつきました。

プロローグ

私こと上条当麻は不幸である。
道を歩けば車が突っ込んで来て、空を見上げれば植木鉢が頭上に落ちてくる。
毎日が生傷の絶えない日々であった。

そりゃまあ、昔はこんなの関係ないとばかりにいろいろと周りを巻き込んで無茶なことばかりしたものであった。

その結果が――『厄病神』――なんて呼ばれるようになることであった。

だいたい幼稚園に通っていたくらいの時のことだ。
あの時のことは今でも鮮明に思い出せるからたぶんそうであろう。
まだ俺は厄病神なんて呼ばれていなかったが、いじめを受けていたのであった。
それもかなり陰湿な。

それは、
＞上条当麻と遊んだ子供は必ずと言っていいほどに傷を負う＜
なんて噂が保護者の間で流れはじめていたのだった。
そりゃあまあ、一、二回なら傷を負っても＞わんぱく＜だねで、すんでいたのだが。
それが何回も何回も起これば、ましてはその遊んだときに必ずと言っていい確率で俺がいたなら、気味悪がるだろう。わが子を近付けたくなんて――ないだろう。

そして、俺の噂は確信に変わり、上条当麻が自分達のそばにいると、自分達まで不幸になる。と言われるようになってきたのだった。

だが、それでも俺はめげなかった。
俺のせいで周りが傷つくなら、俺が周囲の人間達を救えばいい。
そんな『幻想』を持っていたのだ。
バカな考え方だろう。そんなことしても何の意味もないのに。周囲の人間を傷つけたくなければ、関わらなければいいのに。
そんな幻想を持って、あのころの俺は必死に勉強し、身体も鍛えていたのだ。幼稚園が終わったあとに遊ぶような友達なんて呼べるやつはいなかったからだ。

いや、一人だけいた。俺と同じように気味悪がられていた、あの白い奴〇〇〇〇〇が。
名前なんて、もう忘れてしまった。覚えているのは、

『苗字は二文字、名前は三文字。たいしてめずらしくもねェ名前だろ？』

なんて自己紹介してきたことぐらい。
俺たちは今思えばどこか似ている部分があったと思う。
だからすぐ仲良くなれた。
いつか公園で遊んでいたとき、あいつは確か、俺の目の前で黒い服を着た男たちに連れて行かれたんだっけ。あれもあのころの俺に強烈なトラウマを植えつけてくれたもんだった。
生きているかなぁ。
もし生きていたらあの白い友人は、今の俺を見てもまだ『かみやン』とあだ名で呼んでくれるだろうか。

まぁ、今となってはもうわからない。あいつがどこに、なんの目的で連れて行かれたのかもわからないからだ。

・・・。

話がそれたんだが、そろそろ語らせてもらう。

あの事件が起こったのはちょうど幼稚園の卒業まじかの時であった。包丁をもった銀行強盗が園内に侵入してきたのである。
さすがの不幸なれをしていた俺は、いち早く行動し、ここで挽回してあいつを倒せばヒーローになれる！みんなまた俺と遊んでくれる！なんて思っていた。
だがそれはもちろん甘い考えだった。

一人の園児が捕らえられ、包丁を突きつけられていた。
先生の制止を振り切り、気がつかれないように、そ～っと強盗の強盗の後ろに回った俺は幼いながらに頭を働かせて棚の上から力いっぱいに持っていた国語辞典を強盗の頭に向かって振りおろした。
幸い、幼稚園児の心もとない力でも全力の国語辞典は効いたらしく、強盗は持っていた包丁を落としてあっけなくうつぶせに倒れたのだった。

やった！そう思った。
だが本当の地獄はここからだった。

連行されていく強盗の背中を見つつ俺はこう言った。

『みんな無事でよかったよ！』

なんて。
すぐ俺はこの言葉を言ったこと後悔することになる。
すこしはにかみつつ顔を上げると、そこには憤怒、憎悪の顔であふれていた。

『なに言ってんだよ。全部お前のせいじゃん！』『お前がいなければこんなことなかったんだよ！』『消えろよ！』『〇ね！この疫病神が！』『お前いったいなんなんだよ！』『どうせお前がまた呼び寄せたんだよ！』『笑ってんじゃねーよ！』『この化け物が！』『疫病神！』『疫病神！』『疫病神！』『疫病神が！』『本当に疫病神だな！』『疫病神がっ！』

『『『『『お前なんか消えちまえ！！！！』』』』』

こうして、俺の心は壊れたのだった。
ほどなくして俺もアイツと同じように黒い服の男達に連れて行かれた。
俺とアイツの物語の中心舞台、＞学園都市＜に。

プロローグ（後書き）

二回も間違って消してしまい、書き直しました・・・。

がんばったぜ、俺！

００１話　七月十九日（前書き）

作者が思うに、初期の御坂はＤＱＮすぐると思うのですよ。常考。

※御坂が嫁という方は逃げて！

あと、作者はバトル（？）をはじめて書きます。

変かもしれませんが、よろしくお願いします。

００１話　七月十九日

その日はとても気分がよかったのだ。
なにせ明日からは夏休み。くそ面倒な学校から約一ヶ月ほど開放される。
どんな形であれ学生であれば喜ぶことはあっても非難することはないだろう。

七月十九日。

そう、七月十九日がすべて悪いのだ。
明日から夏休みだ！と、ひそかにテンションがあがっていたし、朝から不幸なことは目覚まし時計が壊れる、なんてことしかなかった。非常に珍しいことである。

だから、今日は外食ＤＡ！とファミレスへ入り、明らかによっていて絡んでいる中学生くらいの女の子の顔も見えていない不良を、助けてやっかなー、とか常軌を逸した思考回路が働いてしまったのだ。

まさか人がありがたく忠告してやってんのに逆に襲いかかってくるとは思いもしなかったのだ。
っち！なれないことするからかなぁ。
しかも言ったそばからトイレからお仲間がぞろぞろと出てきたし。
集団でトイレに行くのはオンナノコの特権だろ？不良なんかがするなよ！

深夜の裏路地を走りながらチラリと後ろを見る。
六人。
まぁ、六人くらいなら大丈夫だろう。

しばらく走っていたらちょうど六でも相手できそうな少しひらけた場所にでる。
よし、ここならいける。
不良たちも追いついてきている。

「あーあ。不幸だなあ。せっかく人が忠告してやったのに。俺みたいなレベル0とレベル5相手にすんのどっちのがいいんだよってんだ」

「あんっ？なにってん・・・ごぽぁ！」

まずは一人。
油断しきっているヤツの顔面に拳を叩き込む。

「は・・・？っつ！」

二人目。
お仲間が一発で伸されるのを見て驚いているヤツの腹に蹴りを思いっきり放つ。

二人を伸しているうちに遅れていたあとの四人が追いついてきた。

あとの二人はもう少し奥に見えた。ぜんぜんいける。

「チッ！お前なにチョーシくれてんだおらぁ！！」

と、バカみたいにまっすぐ殴ってきた不良（C）の顔にカウンターの要領で思いっきり殴り、吹っ飛んでいった。

三人目。

「ヒヒッ！後ろががら空きだぜぇ！死ねぇ！」

不良（D）が後ろからどこからか持ち出した鉄パイプで殴ってきた。だがそれを＞見もしないで蹴り上げる＜

「はっ？おまっ、完全にソレが出来るタイミングじゃなかっただろォ！？」

出来るタイミング？笑わせる。

これくらい出来なきゃ、俺はもう＞とっくに死んでいる＜わ。こんなもんじゃないんだよ。

俺の平和な日常（笑）は。

「いやぁ、俺って不幸なんだわ。裏路地歩いたらお前らみたいな不良なんかスグ襲ってくる。そんな日常を過ごしている俺が。弱いはずねぇだろォ？」

俺はニタニタと笑いながら、追いついてきて倒れている3人を唖然とした表情で眺めている二人と自分のエモノを完全に無理だと思っていたタイミングで吹き飛ばされ、顔が青ざめている不良（D）に話しかける。

「だから。これで許してやっからさ。君たちはもう家に帰りなよ？あいつらみたいになりたくないだろ？」

うむ。ここで凹してもいいんだがちと面倒だ。
せっかく明日は夏休みだし楽しい気持ちで明日を迎えたいものである。
と、平和に交渉していたら不良の後ろ側から電気の槍が飛んできて、不良どもを黒こげにしてしまった。
だから言ったのになぁ。
ったく、今日の俺は機嫌がよかったはずなのに。

「ったく、何やってんのよアンタ。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかぁ？」

ほら来た。
いっつもこんな感じの女の子だ。
かれこれ一ヶ月近く顔を合わせているくせに、お互いに名前も教えあっていない。
俺はこの女の子を知っているがな。
この女の子はレベル５の序列３位、超電磁砲その人なのである。
全員で八人しかいない、レベル５の一人であるから有名なのもしょうがないのかも知れない。
だがまあ八人と言っても一人は世間に知られていない。学園都市側から隠されているから実質世間に知られているのは七人なのだが。
まぁ、今はそんなことどうでもいいだろう。
目の前の敵に集中しなければ。

「つか、俺がなにしたってんだ？」

「私は、自分より強い『人間』が存在するのが許せないの。理由がそれだけあれば十分」

・・・イラッ☆これだよ。

一ヶ月の間、追いかけまわされてる理由がこれだとこの少女は言うのだ。

これにイライラすんなと言うのは無理がある話しだろう。

この少女が自分の好みのタイプだったらいくらでも追いかけまわしてもらい、堂々と「ありがとうございまーす！！！」なんて言えるのだが。

あいにく俺の好みのタイプは目の前のすらっとした少女ではなく、むっちり系のお姉さんタイプが好みなのであった。

話がそれたが、最近の格闘ゲームのキャラでさえもうちょいマシな設定なはずである。

第一、そんな理由で一ヶ月も追い回すなんて頭大丈夫だろうか。腕がよすぎて逆に憎たらしい『冥土返し』なんて医者を知っているから紹介してあげたいくらいである。

「けどあんたもバカにしてるわよね。私はレベル5なのよ？弱者の料理法なんて覚えてるわよ。それに――」

おや？まだ何か言っている。

人を馬鹿にした態度といい、本当にイライラしてくる。

もしかしてこの先もずっと追いかけてくるのかなぁ。だったら、

――今のうちに潰しておいた方がいいんじゃないか――

うん。それだ。今までの自分がやさしすぎたんだろう。表の人間だからって容赦をしてきたのかもしれない。
あの＞事件＜のあとからは俺はいつもそうしてきたし。もう歯向かって来ないくらいに叩き潰でばいいのだ。どうせ、この少女の攻撃は俺には＞効かない＜だろうからな。
・・・・。

俺は、笑いながらそう言った。

「オマエ、本当についてねーよ」

００１話　七月十九日（後書き）

作者はツンデレキャラがあんまり好きではないです。

御坂ファンの皆様、すみませんでした。

００２話　七月十九日？（前書き）

今回は少し御坂Ｓｉｄｅだけです。

つか、バトル描写下手すぎてワロタｗｗｗ

※苦手な方は戻る推奨。御坂がボコボコにされています。

００２話　七月十九日？

～御坂Ｓｉｄｅ～

「オマエ、本当についてねーよ」

ゾクッ！

少し笑いながらそういったアイツの雰囲気が急に豹変したように感じた。

待って、アイツの能力が超能力を打ち消すものだとして、もしアイツが本当にやる気になったら・・・？

一生能力を封じられる！？

だがもしもそうであったら最初っからやっているわよね・・・。

ううん、私はレベル５のレールガンなの！それがこんなのに負ける訳がない！

「わ、私を誰だと思ってんの？学園都市でも七人しかいないレベル５なのよ？」

「ハッ！だからどうした？つうか、勝負中に気安く話しかけて来てんじゃっ、ねえ！」ガッ！

っ！速い！アイツが弾丸のようなスピードで私に突っ込んできた。

一瞬で懐までもぐりこまれてしまった。これじゃ電気が間に合わない！

「ハハッ！遅いよ、遅すぎるぞビリビリィ！」

そのままの勢いで岩のように硬いアイツの拳が私に突き刺さった。

「ごっふ・・・」

そのまま、アイツはボクシングのような構えをとり、つずけて二発殴ってきた。

「ぐっ、ひうっ」

「つうか、さっきまでの威勢はどうした？もう終わりかぁ？」

いつもアイツは私に攻撃なんてしてこなかった。
それが今回攻めに転じただけで・・・こんなにもっ！だけどあきらめる訳にはいかない！

「げほっ、まだ、まだいけるわよっ！」

こんな簡単にあきらめるものですかっ！

「へぇ、まだ動けんのか。さすがレベル5。そこらへんのオジョーサマとは違うんだな。んで、何するんだ？俺には電撃は効かねぇんだぞ？」

まだ、あれをやっていない。本気で能力をつかっていない！

「っあ！うわぁあああああ！！！」

「ん？おま、雲がっ？雷でも落とす気か！？そんなことしたら周りの電化製品が！」

・・・。
ゴロゴロゴロ・・・・ぴしゃっ！ガァアアアアン！！

・・・。
き、効いた？さすがにアイツでもこれは無理でしょうね・・・。
「やった！ついにアイツに「勝った。と、思ったか？」
うそ・・・、だ。
「あーあーどうするんだよ、ここら一帯停電だぞ？これ」
「うそっ！なんで生きてるのよっ！」

ありえない！私の！全力攻撃よ！？

「んー。そうだ、ビリビリ。学園都市にレベル５って八人いるんだぜ？実は」

ハァ？こんな時いきなりなにいってんの！？こいつ！

「は？どうゆうこと？それ！レベル５は七人でしょ！？」

「あ、そ。オマエがそう思うならそうなんじゃない？てか、オマエもう俺に付きまとうなよ」

「話をそらさないでよ！」

「てか、俺の勝ちだよな？この勝負。だからこれ以上付きまとうなっつってんの」

「い、いやよ！まだ終わってないわ！」

「じゃあ、いつ終わるんだよ？」

うっ・・・。ど、どうしよう。そんなこと考えてなかった。

「わ・・・、私が勝ったときよ！」

「はぁ・・・。もう面倒だ。寝てろよ、ビリビリっ！」

え、ちょっ！いきなり攻撃なんてっ！

くそ・・・意識がなくなっていく・・・。思いっきりみぞおちを殴

られたし・・・・。

もうっ！なんなのよ！アイツは！

００２話　七月十九日？（後書き）

なんか変ですかね＾＾；

話が急展開すぎているかも・・・。

御坂って負けず嫌いですよね。あと、レベル５のプライド。

００３話　七月二十日　本編開始（前書き）

いやァ、遅れてすみません。００３話です。

う～ん、上条（悪）ちょっとやわらかいかな？まだ。

もっと悪党みたいなのがいいんでしょうか？

００３話　七月二十日　本編開始

七月二十日。夏休み初日。

昨日のビリビリのおかげでエアコンを含む、電化製品の八割が殺られていた。うだるような熱気が、上条の住んでいる学生寮の一室を支配した。

「・・・いや、こんなモンだってなあ、分かってんだけど、なァ」

ついでにその電化製品の中には冷蔵庫も含まれていて、それは、中身が全滅していることを意味していたのであった。

しかも非常食のカップメン類は、ちょうど切らしている。

昨日の朝カップヤキソバを流し台に麺をぶちまけて、少し火傷をしてしまったことを思い出してしまったではないか。

「ッチ、いつも道理不幸だよ、こんちくしょうが・・・」

嘆いてても仕方ないからファミレスにでも行こうかと、サイフを探しても見つからないし、探している内にキャッシュカードを踏み砕き、どこを探してもサイフは見つからない。

イライラしてきた。つか、こんなときにサイフが見つからないと無性にイライラしてくる（経験談）。

もう面倒になって二度寝でもしようかと思えば、電話でたたき起こされて、『上条ちゃーん、バカだから補習ですー♪』と、担任からのラブコールまできやがった。

占いは必ず外れ、おまじないは成功した試しがない。しかも街を歩いていたらツッパッている系の人種に絡まれる。
それが上条当麻の素敵すぎる平和な日常（笑）であった。

この体質が、一族に伝わっている様なものかと思いきや父は宝くじで3等を当てるし、母は福引で薄型テレビなんてものを当てていた。

もちろん血がつながっていないフラグもない、正真正銘親子のであった。

結論から言うと、上条当麻は不幸すぎたのであった。
街では平気で車も突っ込んでくるし、工事現場付近を歩けば、鉄骨が降ってくる。

そんな人生やってられないだろう。どんな人物でも。

だから上条は自分の人生に早々に見切りをつけ、愉快に楽しく自分の思い道理な行動をするようになっていた。
そのために知識をつけ、ちいさい頃から体も鍛えたし、格闘技も身につけたりした。
気を抜いたらすぐ死んでしまうような人生なら、どうせなら不幸に振り回されない、自由に生きよう、と。
だから上条は自分が一番大事なのである。

さて、いつまでもグダグダしてられない。流石に腹が減ってきたのであった。

「・・・さて、っと。目下の問題はカードと冷蔵庫かな」

上条は部屋を見回す。

カードは通帳さえあれば再発行は難しくないだろう。
問題は、冷蔵庫であった。と、言うより朝飯であった。夏休みの補習は、上条が苦手であった、というか無理である、能力開発の補習であったはずだ。
ならば、錠剤や粉薬を飲むに決まっている。ならば腹に何か入れなければ不味かろう。

まあ、朝飯なら途中でコンビニにでも寄ればいいのだ。解決。

うし、じゃあ出かける前に最近干していなかった布団でも干していくかなー。なんて考えつつ布団を抱え、ベランダのほうへ向かう。

網戸を開くと、すでに白い布団が干してあるのが見えた。
なぜであろうか、すんごく嫌な予感がした。それも、これからとてつもなく不幸なことが訪れるような予感がした。

学生寮といっても造りはワンルームマンションである。当然、上条は一人暮らしであった。
なので、この部屋で布団をベランダの手すりに引っ掛けるような人物は上条しかいない。ますます嫌な予感がする。
なので、よく見れば布団なんてものではなかった。当然である。

――干してあったのは白い修道服の様なものを着た、女の子なのであった――

「・・・不幸だ」

思わず、つぶやいてしまう。

これからどんなことが起こるのだろうか。マフィアの様な黒い服を着た素敵なオジサンに追われる？秘密を知ってしまったとかなんとかで。
それとも、ヤのつく職業の方に自宅まで詰められる？小指とバイバイしちゃったりして。

・・・ハァ。付き合ってられん。

しばらく観察をつずけると、その女の子がピクン、と動いた。
だらりと下がった首がゆっくりと上がってくる。上条のほうを向いた顔が、少しずつ露になってきた。
なかなかに綺麗ではあるが、好みではない。五年後に期待できそうだな。

そもそも外国人のような顔立ちである。
上条に外国語なんかしゃべれる訳がなかった。鎖国推奨派である。

「ォ――――」

ん？女の子が何かしゃべったぞ？

「おなかへった」

第一声がそれでせうか。
・・・そんなのしらねーよ。

００３話　七月二十日　本編開始（後書き）

感想を受けての、緊急アンケ。一巻の内容が終わるまでに。

作者的にも五和は出したい！だが天草式編まで待ち、フラグ発生させるのは長すぐるし、明確な理由が解らない。どうしましょう。

そこで！

このままインなんとかさんルートにいくか、

過去を改変して五和幼馴染で、昔白い人と一緒に遊んでいたルートを捏造するか。

どうしましょうか。

意見が無ければ予定道理に、トウマー。ご飯～♪ルート直行です。

あ、■■・・・。

００４話　七月二十日？（前書き）

まだまだ一巻の内容ばかりですね。長いぜ。

※今回はつまんないかも。

００４話　七月二十日？

「・・・・・・・・・・・・・」

「おなかへった」

「・・・」

「おなかへった」

「・・・・・・」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

そんなの知らねーよ！人の家のベランダに勝手に引っかかったあげく、真っ先に飯の要求してきたんですけどーこの女の子！
あらやだ、やばくね？確実に電波ちゃんだよ。うう、不幸の香りがプンプンしてくる。
まさしく親方ー！空から女の子がー！だな。まあ、空からかはわからないけど。

・・・。
修道服着てて仮にもシスターだとして、こんなに自分の欲望丸出しの発言するのかな・・・。
常識的に考えても、もっとほかの対応の仕方があっただろうに・・・。

「何？アナタはひょっとして、自分は行き倒れです、なんて言いっているつもりなのか？」

「倒れ死に、とも言う」

見た目に反して日本語ペラペラなんだな・・。

「・・・」

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

そういえば何日か前に食べ忘れたヤキソバパンがその辺にあったはずである。

・・・。

あげてみるか。

流石に腹減ってるなんて言っても、すっぱいにおいがするパンを見せても食わないであろう。そして怒るなりしてもらい、不幸なことが起こる前に早めにお引取り願おう。

そう、＞俺に関わって不幸なことが起こってしまう前に＜。

「ほれ、家には今はこんなもんしかないぜ」

うむ、今日のヤキソバパン君（腐）はすこぶる機嫌がいい。

この女の子が一体何なのかはわからないが、何にしても俺なんかと関わらないほうがいいのだ。この子のは遠いどこかで幸せになってもらおう。

ほら、とパンを差し出す。

すると少女は「ありがとう、そしていただきます」と言い、迷わず

かぶりついた。

がっつりとラップごと。

「えぇ～・・・」

002

「まずは自己紹介しなくちゃいけないね」

先ほどまでラップごとヤキソバパンを食べていた少女が言った。

あ、そこからかよ。そういえば聞いていなかったかもしれん。

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ？」

「ッチ、誰が聞いても偽名じゃねーか。・・・目次かよ、お前は」

「見てのとおり教会の者です。あ、ここ重要なんだけど、バチカンのほうじゃなくてイギリス正教のほうだね」

「意味わかんねーし、それよりお前、インデックスつったか？これ以上おｒ「うーん、禁書目録の事なんだけど。あ、魔法名なら『Ｄｅｄｉｃａｔｕｓ５４５』ね」

「・・・うわぁ」

うん、電波ちゃんですね。確定だな、これは。自分の世界に入っちゃってますよー。この子。

はあ、一体どうして俺はこんな少女とお見合いよろしく向かい合って会話なんかしてるんだろう。

そろそろ学校へ行かないと補修に間に合わなくなる。だが、こんな得体の知れない電波ちゃんを部屋に残しておくのは何か危険だと俺のセンサーが告げている。

もう腹にズドンで放置でいいだろうか。柵に引っかかっていたぐらいだし大丈夫な気がする。どちらにしろ、このままではこの少女にも不幸が降りかかってしまう。

「それでね、このインデックスにおなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

どうしてそうなった。

「なんで俺がお前に飯奢らなくちゃなんねーんだよ。パン食ったな

らとっとと消えろよ」

なぜ俺が見ず知らずの少女に尽くさなくちゃなんねえんだ。せめて5年後にでも来たらよろこんでおもてなしするが。

あいにく俺はロリコンでもなんでもないのだよ。

「けど、このまま外に出たらドアから三歩で行き倒れるよ？」

「いや、行き倒れるよ？じゃなくて。このまま一緒にいたらお前も不幸に巻き込まれるぜ？」

「・・・？不幸？」

「そ、不幸だからお前も不幸にならない内に消えろっってんの」

「で、でも、外で仮に誰かに助けられたとして、そこに拉致監禁されてこんなにやつれるまでイジメ倒されたって言っちゃうよ？・・・・、こんなコスプレ衣装を強要されていたとも！」

・・・、なんだこいつ。

純粋そうな目をしているくせに、平気な顔でこんなこと・・・。

「ッチ、解ったよ。でも昨日の停電で冷蔵庫は死んでいるからな。ロクなもん期待すんじゃねえぞ」

冷蔵庫の中には痛んだ野菜とかしか無かった。

ま、熱を通せば大丈夫であろう。とりあえずフライパンにぶち込んで野菜炒め風の何かでも作ってやろうか。

うーん、そういえばこいつはどこから来たんだ？
そりゃ学園都市にも外国人はいるが、こいつは何か学園都市の人間とまとってるオーラつうか空気がちがう気がする。
外の人間だったとしても、ここはなんとなくで迷いこめる様な場所ではないはずである。ゲートには申請しないと通過できないばかりか、警備員もいるし、風紀委員もいる。

そんな簡単には進入できないはずだろ？
・・・ま、聞いてみるか。

「で、なんだってお前は家のベランダに引っかかってたんだ？」
野菜炒め風にしょうゆ油をぶち込みながら聞いてみた。

「別に干してあった訳じゃないよ？」

「じゃあなんだ、風にでも流されたのか？」

「・・・、似たようなモノかも」

は？冗談だろ？

「落ちたんだよ。ホントは屋上から屋上へ飛び移るつもりだったんだけど」

屋上？このあたりは学生寮が立ち並ぶ区画で、隣のビルとビルの隙間が二メートル程しかないとはいえここは八階建てである。
たしかに走り幅跳びのように飛べばいけるかもしれないが危険すぎるだろう。

「八階だぜ？一歩間違えば落ちて死んじまう高さだぞ」

「けど、仕方なかったんだよ。あの時はああする他に逃げ道が無かったんだし」

「逃げ道だと？」

不穏な単語に思わず眉をひそめる。それじゃあまるでお前が追われた結果にああなったみたいな言い方――じゃないか。

「うん、追われていたからね」

００４話　七月二十日？（後書き）

ちゅーと半端なところで切ってしまい、申し訳ありません。精進します。

００５話　七月二十日？（前書き）

感想で要望がありましたので、復活です。

００５話　七月二十日？

思わず上条の手が止まった。

「・・・・、」

禁書目録と名乗った少女は笑いながら言う。

「本当はちゃんと飛び移れるはずだったんだけど、飛んでいる最中に背中を撃たれちゃってね」

「ゴメンね？途中で引っかかっちゃったみたい」

自嘲でも皮肉でもなく。ただ上条に微笑みかけながら。

「はあん・・・」

なるほどね。この娘はこうゆう系ね。理解した。

なら、なおさら自分なんかといつまでも一緒にいたら駄目だろう。

「なら、撃たれたなら傷なんかはないのか？」

どうやら野菜共はギリギリ大丈夫だったらしく、フライパンからいい香りがしてきた。

「うん？ああ、傷なら心配ないよ。この服、一応『防護結界』の役割もあるからね」

防護結界？・・・何かは理解できないが、多分その服が少女を守ったのだろう。

なんらかの異能の力が働いているハズだ。触れないように注意しなくてはいけない。

「・・・・ふうん」

この少女は先程追われていると言っていた。だとしたらこの少女はいったい何に追われているんだ？

考えたくはないが本当に魔術なんてものがあるのか？だとしたら魔術師？にしては銃なんて使っているなんておかしいよな・・・。

魔術師なんていうもんだから魔法でも使ってくるだろう。ＭＰ切れか？

「ごはんまだ？」

と、考えている上条の後ろからインデックスの顔が伸びてきた。

「はぁ。今できるからちょっと待ってろよ」

「うん♪」

とりあえず上条は考えを放棄し、出来た料理を皿に移す。

上条のすさんだ世界の中で料理とは、食べる事といえばかなり楽しみにしている事なので、上条の料理の腕は達人級とまではいかないがなかなかのものであった。

「おら、食えよ」

上条が持ってくる間も待てないらしくインデックスは「ごっはん♪ごはっん♪」とフォークをガチャガチャ鳴らしていた。

「うわぁー！これすっごく美味しいんだよ！」

などと勢いよく食べている横で上条はため息をつく。

「はぁ・・・。俺何やってんだろ」

００５話　七月二十日？（後書き）

また、要望がありましたら復活します。

とりあえず憑依がメインの方向で決まりましたので、こっちはチビチビしか更新出来ませんが。

見放す気はさらさらないのでそのうち戻って来ます。

００６話　七月二十日？（前書き）

はじめに。

捏造すみません。

００６話　七月二十日？

インデックスはしばらく話をした後に去って行った。

時折『魔術結社』やら、『十万三千冊』など、気になる事を言ってはいたが俺の知った事ではない。

あ・・・？フード忘れてるなアイツ。まあいい、そのうち取りに来るだろう。

そこで、上条はふと時計を見た。

・・・ん？

あっ補習忘れていた・・・。

００２

かったるい補習も終わり、もう日も傾きかけていた。

「はぁ・・・」

灼熱のような気温の商店街を歩く上条を警備ロボットが追い抜いていく。

当たり前だがロボは暑さなど関係ないというようなスピードで動いていた。

・・・。上に乗ってはいけないのだろうか？

隣に住んでいる土御門の妹がこれに乗っている姿をたまに見かけるが・・・。

「あっ、いたいた。見つけたぞこの野郎！ちょっと待ちなさ・・・・・ちょっと！アンタよアンタ！止まりなさいってば！！」

後ろから何か聞こえる。

気のせいだろう。

「ちょっと！？む、無視すんなやコラーーーー！」

アーアーキコエナーイ。

「ッッッッ！止まれってんでしょうがー！」

ん？不幸センサーが反応してる？

やれやれ、といった感じで上条は振り返る。
振り返ると目の前には電撃のようなものが迫っていた。
「はあ。危なっ」
だがそれを上条はなれた手つきでトゥルーン！と打ち消す。
「チッ、んだよ？ビリビリ第三位様？」
「ビリビリって言うなってんでしょ！？最初っからさぁ！」
そこには御坂美琴がいた。
ただこの前あったときと違うところがあるとすれば、この間殴ったときに出来たであろう顔のガーゼくらいか。
「お前も本当にしつこいよな。で？用があるから呼び止めたんだろ？なんだよ」
「ふんっ、納得いかないのよ！なんで第三位の私が無能力者になんか負けなきゃなんないのよ！」
何度も負けてるくせに。こいつはなんなんだろう。
「はあ。じゃあ解ったから人がいない所に行こうぜ？」
もう一度解らせなきゃ駄目なのだろうか。

「と、当然よっ！」

００３

周りに何もないような空き地まで上条達はやってきた。

「うっし！じゃあやるわよ！」

上条はうんざりとした気持ちでこたえる。

「わぁったよ」

コイツのようなタイプの人間は、一度だけじゃたりないだろう。

何度も、何度も解らせてやらなくちゃ駄目だ。

「合図なんかはいらないわよね？」

御坂は油断している。今がチャンスだ。

「おお。安心して沈めよ」

ドゴッ！っと音がするような勢いで上条が御坂の腹をなぐる。

「えっ・・・？」

御坂はまだ状況が理解できてないようだった。

「こないだの話の続きをしてやるよ」

「ゲホッ・・・」

「レベル5は八人いるっったろ？」

「ハァ・・・、グッ、それ・・がなによ・・・？」

「あれ、八人目は俺なんだわ。第七位以上に解らない、ただどんな能力でも打ち消せる能力としか解らないから八位。研究対象にすらなりゃしねえからさ」

「はっ・・・？なにそれ・・？」

「まー。そうゆうことさ。同じレベル5どうし、負けたって気にするなよ。だからさ。もう俺に突っかかってくんなよ」

上条はそれだけを言い残し、去っていった。

一人残された御坂はただ呆然とするしかなかった。

００６話　七月二十日？（後書き）

どんなに研究員や両親が誘っても学園都市に行こうとしなかった上条に学園都市側が、

科学者「その能力を研究させて欲しい！その代わりに君には第八位の称号を与えよう！金もたっぷりはいるぞ！？」

ガキ条「金・・・？金、自由、ダレモキズツケナイ・・・？」

科学者「おお！そうだとも！アレイスター学園長からちゃんと許可を得たんだぞ！」

みたいな。

レベル５は御坂以外みんな性格に難があるってどこかで言ってましたよね。

・序列

第一位　＞『一方通報』ロリコン＜

第二位　＞『幻想思考』メルヘン＜

第三位　＞『発言逆行』ツンデレ＜

第四位　＞『病的愛情』ヤンデレ＜

第七位　＞『熱血根性』マツオカ＜

第八位　＞『崩壊性格』ゲンソウ＜

・・・あれ？家の上条は違和感ないぞ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2030r/

上条当麻はなにを見る

2011年7月20日21時15分発行